

札幌で直下型地震は起きるか？

平成24年11月24日18時頃、千葉県北西部を震源とする地震があり、首都圏で震度4を観測し、新幹線が運転見合わせとなったとの報道がなされた。地球の構造は卵になぞえられる。すなわち、地殻・マントル・核は、それぞれ卵殻・白身・黄身にあたる（比率も類似している）。地殻は、一つの塊ではなく不規則な形をした「テクトニック・プレート」と呼ばれる板がジグソーパズルの様に組み合わさって出来ている。地震の頻発する場所はプレートの端でプレート境界と呼ばれ、プレートは移動し続けているので互いにぶつかり合う場所でもある。地球は47のプレートで構成されている。

地質上の重要な発見の一つに、地球は地震と共に生きていくというものがある。こうした地震のほぼすべてがプレート境界に沿った狭い地域で発生している。これは「環太平洋火山帯」として知られており、日本列島もその一部に含まれている。「地震大国」と言われる所以である。地震とは地球内部のエネルギーが突然放出されることにより起きる岩盤の弾性的な震動である。岩盤が急に割れたり、破壊が生じたりすることを引き金として起きる。地震により地形を横切るように走る断層が発生する地震断層のうち、活動性を有していると活断層と呼ばれ、直下型地震の発生確率が上昇するとされている。札幌近郊では、当別断層帯と石狩低地東縁断層帯とがあるが、札幌直下型地震は有史来記録が見られない。地震発生予測は非常に難しいが、過去最大のチリ地震はM9.5であり、M10の巨大地震は理論上否定できないが、確率上非常に低いとされている。

札幌は、M6以上の大地震の起こる可能性が低いと思われるが、医師会館の耐震性を強化させるために億単位の費用をかけるのは、費用捻出を含めて非現実的と考えるが、諸兄の皆様はいかが考えられておられますか？
(CAT)



大通公園を望む窓辺から

ハンセン病に思うこと

ハンセン病はわが国でも古くから知られていて、日本書紀にも「癩（らい）」という言葉が記載されている。ライ病は遺伝する病気として、洋の東西を問わず忌み嫌われていた。親や先祖が犯した罪が子供に引き継がれる「業病」とか、天が罰する刑とし「天刑病」などと呼ばれていた。

去る9月29日の北海道医学大会で、国立保健医療科学院 松谷有希雄院長の「ハンセン病の近代史」と題する特別講演を拝聴した。国は1907年、ライ予防に関する公布令を発令して、患者隔離や断種手術などを義務づけた人権侵害政策に始まった歴史的な考察についての講演であった。この施策を受けて1930年、日本初の国立ハンセン病療養所として設立された長島愛生園の初代園長・光田健輔氏の命を受けた小川正子医師は、四国各地を1932年から4年間にわたって巡回診療を行い患者の収容に努めた。

小川正子氏は「小島の春・ある女医の手記」を出版した。後に映画化され好評を博した。しかし、無ライ県運動に加担する「魔女狩り」として批判も浴びた。

わが国では1996年になって「ライ予防法の廃止」が決まり、2001年国家賠償請求訴訟が原告勝訴により、90年の永きにわたって行われた隔離政策に終わりが告げられた。

数年前、私は国立療養所邑久光明園・長島愛生園の2ヵ所を訪問する機会を得た。四方を海に囲まれ、瀬戸内海を望むのどかな長島には当時、両園併せて780名程度60歳以上の病状は安定した方々が入所していた。

嘗（かつ）ては、僅か30mの海で隔てられた本土と長島の間は船での往来だけが許される近くて遠い海峡であったが、今では1988年に「人間回復の橋」と名づけられた135mのアーチ型の邑久長島大橋が架けられ、誰もが自由に往来できるようになった。
(毬栗)